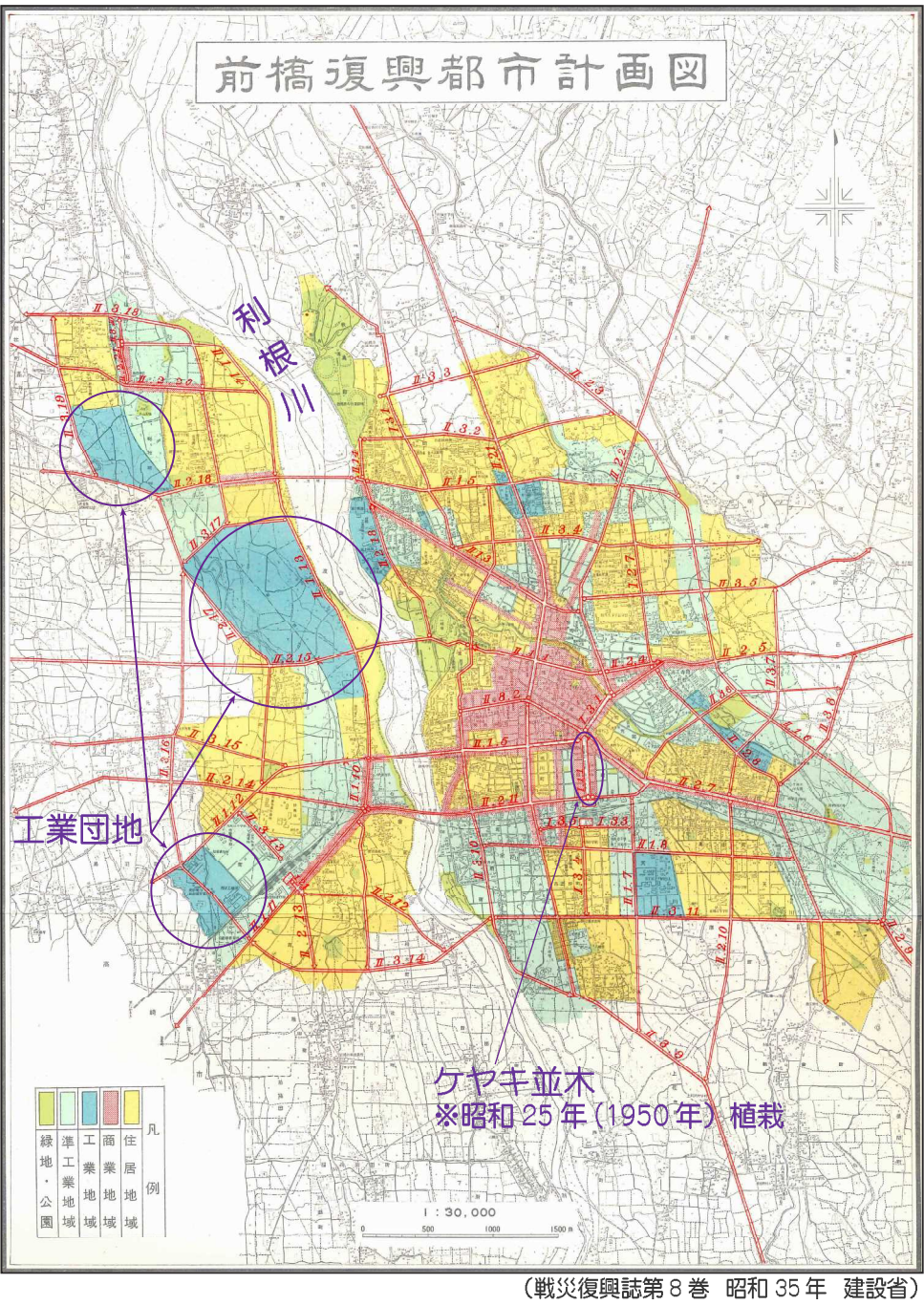
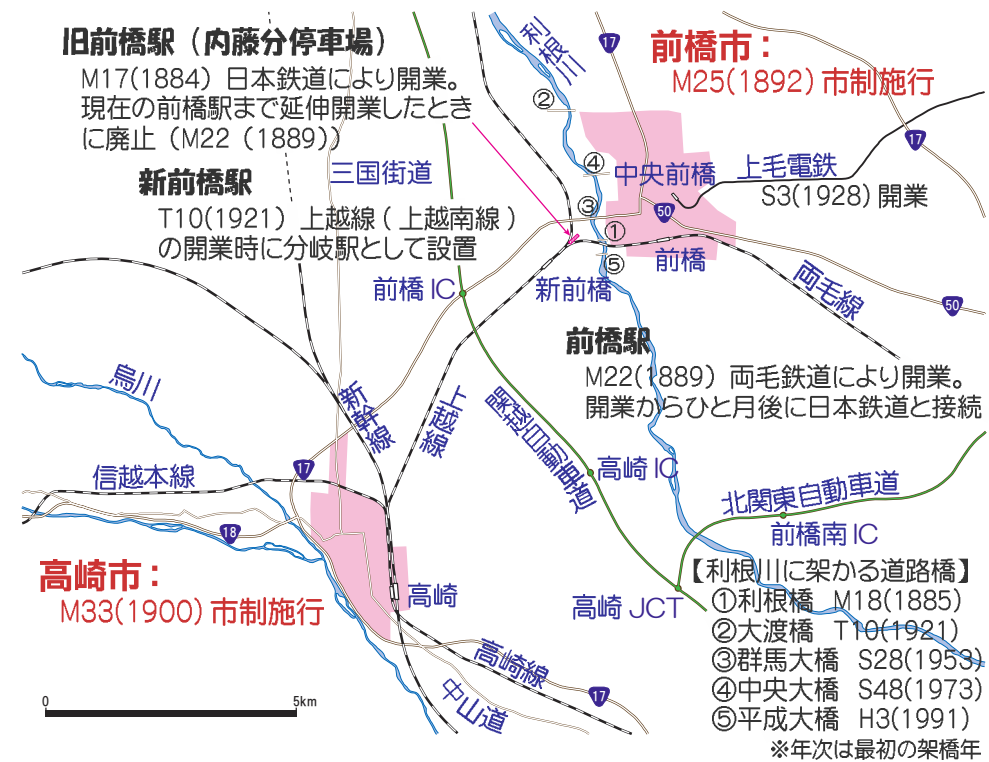


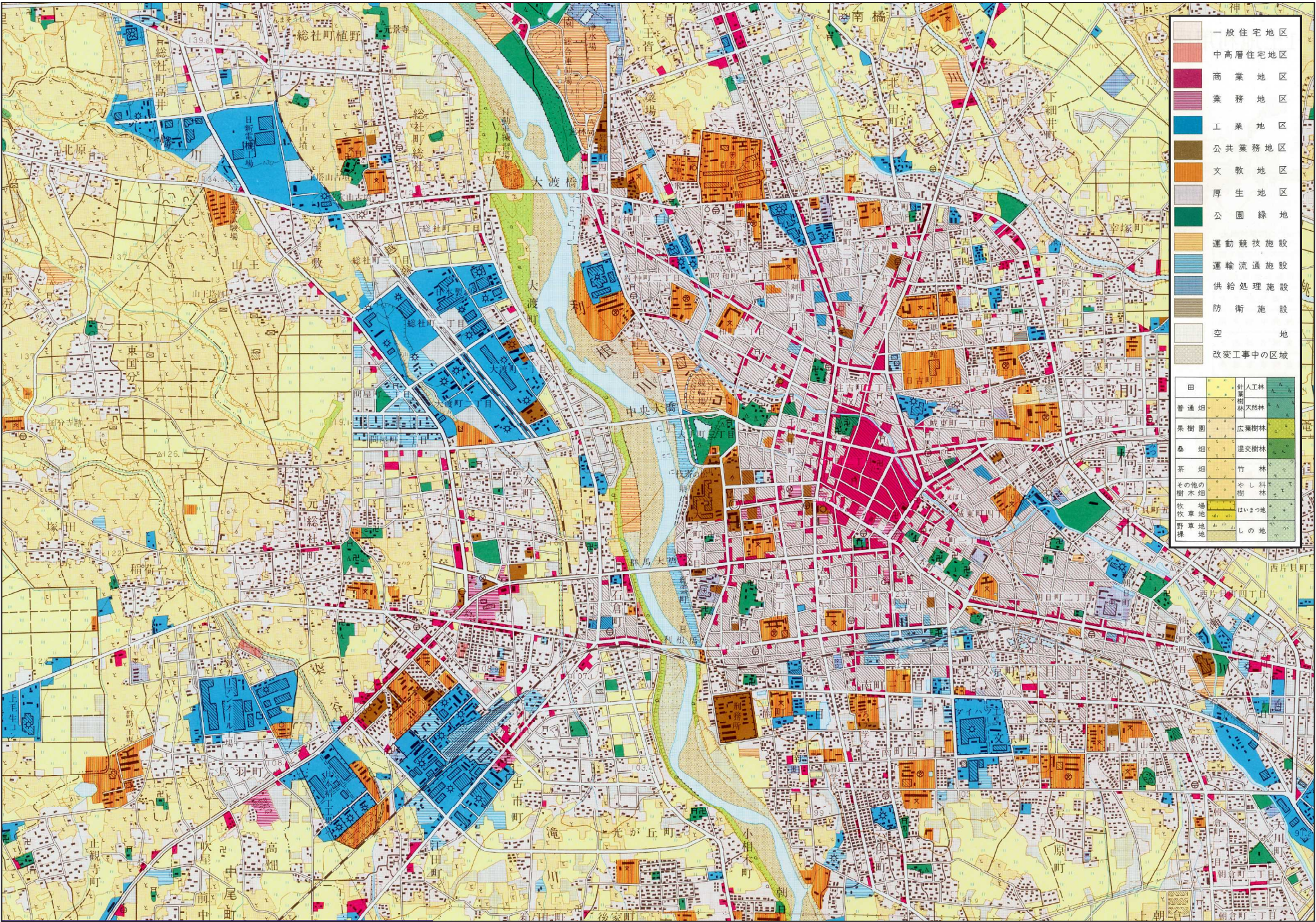
前橋・・・焼失市街地にゆといある都市空間を創造し発展

前橋は、幕末から明治初期にかけて、近代日本の主力輸出品である生糸の生産とその集積地として大きな経済力を有し、さらに明治 14 年（1881 年）に群馬県庁が置かれることになって以降、街の繁栄の基礎が築かれました。昭和 20 年（1945 年）8 月 5 日、夜半の空襲で市中心部の約 8 割を焼失し、加えて主産業の生糸の生産が着物離れや化学繊維・安い輸入品に押されて斜陽化していきましたが、利根川の西側丘陵地に工業団地を積極的に誘致し、街の復興・発展が支えられました。一方、旧市街地は戦災で大部分を焼失しましたが、城下町特有の入り組んだ形体が見直され、街路や公園の整備により近代的都市づくりが図られました。復興事業として植栽された前橋駅北口のケヤキ並木は、その後市内各所に広がり、「水と緑と詩のまち前橋」のシンボルとして美観上豊かな空間を生み出しています。



全国主要都市戦災概況図 附図 26 前橋





いまから 40 年前の前橋市

2万5千分1土地利用図「前橋（昭和50年調査）」（部分拡大）

終戦から 30 年を経た前橋市の様子です。利根川西側の丘陵地に工場などが立地していることがわかります。よく見ると周辺の耕作地の多くは「桑畑」がしめています。最盛期を過ぎたとはいえ、養蚕が盛んだったころの風景が残されていました。



現在の前橋市

2011 年撮影

